

html5 の srcset 属性を使用した レスポンシブサイトの画像配置

apple の Retina が有名ですが、android も多くの機種が高精細となっており、PC でも 4 K が流通してきています。

これらの高精細ディスプレイでは、通常の画面用に用意した画像ではぼけてしまいます。

これに対応するため retina.js などが使われていましたが、より細かく対応できる srcset 属性を img で使えるようになりました。

```

```

(見やすく改行していますが、記述に改行は不要です)

この記載例では、画像を 3 種類用意します。

srcset 属性にそれぞれの画像の相対パスとピクセルレート^(*)を半角スペースを空けて記述し、それぞれをカンマで区切ります。これにより、それぞれのピクセルレートに対応した画像が自動的に選ばれます。

* ピクセルレートとは、htmlでの1pxを何pxで表示するかを表す
retinaや4kは2xとなる。

この srcset 属性は、sizes 属性と組み合わせることによって、画面サイズに応じて画像の表示領域をフルにしたり、サイズを限定する場合にも使用できる。

```

```

(見やすく改行していますが、記述に改行は不要です)

記載例に出てくる単位「vw」はブラウザに対する表示領域の割合(%)
「w」はブラウザの横幅になります。

sizes 属性では

- ・ 1 2 0 0 px 以上の横幅の場合、画像の横幅 600px
- ・ 6 0 0 px ～ 1 1 9 9 px の横幅の場合、画像の横幅はブラウザの 50%
- ・ 5 9 9 px 以下の場合、ブラウザの横幅一杯
に画像を表示します。

sizes 属性は書いた順に確認し、当てはまるものがあつたらそれを使用する css の font-family と同じ方式のため、記載順に注意してください。
srcset 属性では、ブラウザの横幅が 300 以下、301～600、601 ～ 900、901 以上でそれぞれ読み込む画像が変わります。

なお、sizes 属性と socset 属性は一部ブラウザで機能しないケースが存在します。

それに対応する方法として、picturefill という jQuery を使用するのが一般的となっています。

<http://scottjehl.github.io/picturefill/>

ここから D L し、html の head 内に

```
<script src="picturefill.js"></script>
```

を記述します。(js の置き場が html と同じフォルダの場合)